

第8分科会 危機対応

研究課題：学校と子どもを取り巻く危機への対応

危機管理への児童や教職員の意識向上のための取組

～ 「つながり・つなぐ」関係づくり、環境づくりを通して ～

提案者 福山市立御幸小学校長

高橋 富美代

1 はじめに

「危機」について、「どこでも、いつでも起こりうること」であると捉え、学校ではあらゆる危機を想定して、学校が安全・安心して過ごせる場としての環境づくりを、関係機関との連携や校内の情報共有をもとに進めている。

しかし、学校ではコロナ禍で人と人との接触を伴う様々な教育活動が制限されたことで地域との連携が持ちにくくなり、様々な取組の引継ぎが途切れている実態がある。また、教職員の年齢層の若年齢化で、これまでの教育活動の細かい継承が不十分な現実がある。

ここでは、そのような中で地域との連携をもとに行った防災と、校内での事故防止等に向けて行った活動を通して、児童や教職員の危機管理能力の向上を目指した取組を提案する。

2 研究の概要

(1) 地域と共に子供たちの防災意識の向上を目指した取組

① 取組の経緯

本校は、海拔 1.4mの場所にあり、敷地内に川が流れている。大雨の時、浸水や土砂災害の起こりやすい地域の中にある。過去には、2016年（H28年）や2021年（R3年）に近くの山の土砂崩れや、学校の前の道や近くの民家での浸水があった。そのため、地域も災害に備えた取組を積極的に進めてこられた。このような中、学

校も地域と共に防災に取り組み、子供たちの防災意識を高めようと2022年度（R4年度）から5年生の野外活動時に学校で仮設テントを組み立て宿泊を体験する防災キャンプを行っている。地域からも自主防災の取組として行いたいという申し出もいただき、協働して行っている。

② 取組の具体的な内容

ア 避難訓練

近くの消防署の協力を得て消火体験をした後、津波や洪水を想定して校区の小高い丘への避難訓練を行っている。交流館の館長から地域の歴史も学びながら避難している。

イ 土嚢づくり

水害時に地域で使う土嚢づくりを行っている。土嚢は1年でつくり替えなければ、袋が朽ちて使えなくなるので、毎年5年生がつくる土嚢が地域の安心に役立っている。

ウ 非常食の試食

お湯を注ぐと数分で食べれるようになる非常食を保護者の方に手伝っていただきながら準備し、試食体験をしている。

エ 避難テント設営・宿泊

地域で所有しておられる避難テントを地域の方と共に設営し、家庭から簡易的なマットやタオルケットなどを持参して、宿泊体験を行った。

③ 児童の反応

5年児童アンケート		
質問	7月回答	12月回答
学校である避難訓練に真剣に参加している。	48%	80%
家族と避難場所などについて話し合っている。	33%	42.50%
ハザードマップなどを見て、住んでいる場所の危険箇所や安全な場所を知っている	42%	47.50%

【表1 5年児童アンケート】

アンケートの記述では次の内容が見られた。

「災害の恐ろしさを感じた」「災害時に地域でどのようなことが起きるのかわかった」「家族で避難場所について話した」「防災グッズを用意した」「地域の防災訓練に参加した」等、防災意識の高まりや自分たちにできる備えについての記述があった。

(2) 「危機」の未然防止と教職員の危機意識の向上にむけた取組

① 取組の経緯

職場の若年齢層化やのコロナ禍により、学校教育の中で日常的に受け継がれてきた教育活動の具体や危機対応が一人一人の教職員に浸透しにくい状況がある。目の前の児童に応じた教育活動や危機対応の具体に焦点をあて、組織的な動きをつくるため、教職員の危機管理能力を高めるために次の取組を行った。

② 取組の具体的な内容

ア キキたい通信

学期に1回各担当が行っていた学校教育の中での子供たちの事故やけがを防ぐための研修をもっとタイムリーに、生かせるものにするため、月に1回の部会で危機に対する情報交換を行い、それを、校長が不祥事防止の観点からの内容を加えてまとめ、「キキたい通信」として発行している。通信の内容については、暮会で各部から補足などして説明し、教職員全員で共有している。

イ 学年主任を加えた校内委員会

管理職と生徒指導主事、特別支援学級担任で行い、主に特別な支援を必要とする児童について情報共有や取組の方向などについて話し合っていた校内委員会を、各学年主任を交えて行うものに変更した。児童に対する取組を主体的に、かつ組織的に進めるために、情報を全学年で共有し、特別な支援が必要な児童だけでなく、課題のある児童についても実態について話し合い、取組の方向性を確認している。

③ 教職員の反応

取組後のアンケート結果では、「危機管理をとっても意識している」68.8%、「意識している」31.2%を示した。また、感想では「小さなことでも情報を共有する」「児童の安全を守る環境整備を行う」などの記述があった。

(3) 成果と課題

ア 成果

- ・児童が地域の人から身近な災害について聞くことで、児童の防災意識を高め、生活に生かそうとすることにつながった。
- ・身近で具体的な「危機」について話し合うことで、教職員の意識が高まった。
- ・情報を共有することで、教職員自ら進んで、課題があるところに働きかけようとする動きが見られるようになった。

イ 課題

- ・児童が主体的に防災への取組を広げていく活動にまではつながっていない。
- ・一つの危機への対応が他の危機への備えになるような汎用性が低い。
- ・会議の効率化と内容の柔軟性が不十分。

3 校長の役割

(1) 「危機」を未然に防止する組織づくり、環境づくり、体制づくりを行う。

(2) 児童への安全教育のためのカリキュラムをマネジメントし、関係機関や地域と連携しながら推進していく。

(3) 危機発生時に的確に判断し、対応するための危機管理マニュアルの見直しと教職員の意識向上に取り組む。

4 おわりに

「危機」に対する児童や教職員の強い意識の向上と未然防止のために、地域や関係機関とつながり、教職員同士をつなぐことで、組織的・協働的な取組を進めていきたい。